

## 第十七章 京都 — 壇ノ浦の戦い

都も、極寒の時期を脱して、日一日と寒さが緩んでくるような気がするが、朝晩の冷え込みはまだ厳しい。あちこちの寺社で梅のつぼみが開きかけているが、本格的な春までは、もう少し時間が掛かりそうだ。

郷子のつわりは最近ようやく収まってきた。

郷子は、指を折って数えてみた。最後に月のものがあったから、もう三ヶ月近くになるはずだ。すると出産は、秋以降になるだろう。出産は、危険だし出血して不浄と見做されるから、通常は里に帰って行く。里に帰れない場合でも、主人のいるここ堀河館で行う事は避けてどこか他に産所を見なければならぬ。相談しようにも母はいないし、志乃は出産の経験がない。

(そのうち機会を見つけて義母に相談するしかないだろう)と郷子は思う。

郷子は、清水寺の観音菩薩に義経の身体安全を祈願するほか、醍醐寺の薬師如来に安産の祈願もするようになった。

重平からの報告によれば、屋島の勝利から、もう半月ほど義経は屋島付近にとどまり、下の関方面に逃げた平家を直ぐに追う動きはないようだ。迅速かつ疾風のごとき奇襲作戦を得意とする義経の戦略からすると珍しく自制している。この時期、豪雨が多かったこともあるが、すこしづつ西へ移動しながら瀬戸内の水軍に対して源氏への服従を説得しているらしい。その主要な成果として、周防国の舟船奉行、船所五郎正利が五十艘の船を献じてきたという。その船は櫛崎船と呼ばれ、船足が驚くほど速らしい。また、いま平家の本隊が駐留している長門国彦島近辺の海流は、潮の満干が非常に激しいところで、大海原から瀬戸内に潮が入る満潮と瀬戸内から大海原に潮が流れ出る落潮が交互に繰り返され、その潮はいつきの潮止まりを除くと渦を巻きながら矢よりも速く流れるという。義経は、その潮の流れを船所正利から克明に学んで、作戦を立てているところらしい。屋島の合戦に遅参した梶原景時が名誉挽回のために先陣を主張したが、義経は海戦を知らない景時の先陣を拒否して、しんがりを命じたため、またも陰悪な雰囲気になっているとのことであった。

その後何の知らせもないまま、梅が満開になり、清水寺に詣でる郷子の心配がその極に達した頃、伝令によって吉報がもたらされた。

源氏が壇ノ浦の海戦で平家に大勝し、義経は無事であるという。

海戦は、午の刻過ぎ(午後一時頃)の矢合わせから始まった。平家はおよそ八百艘、軍兵は約五千、源氏は、およそ五百艘、軍兵は約四千だった。

当初、潮は西から東に流れ、西から船を進めた平家に有利に作用した。

源氏が、平家の優勢をなんとか凌ぎもち堪えると、未の刻半ば(午後三時頃)に潮が止まった。そして、申の刻(午後四時)になると、潮は東から西へ流れ出した。源氏は、この早潮に乗って、矢を集中的に平家の舵取りや漕ぎ手に集中し、制御が利かなくなって、浮遊しだした平家の船を追尾して

ついには壊滅させた。

敗戦が明らかになると清盛の妻だった二位の尼(建春門院)が孫の安徳天皇を腕に抱き、神剣を腰に差して、入水した。その際、七歳の安徳天皇に「何処に行くのですか」と聞かれ、「浪の下の都に参ります」と答え、安徳天皇も納得したらしい。

安徳天皇の母、清盛の娘である女院(建礼門院)は、入水したが熊手で髪を掴んで船に引き上げられて助かった。

実質的な指揮官の平知盛は、鎧を二領着て、碇を背負い、万一浮かび上がったら弓で射殺してくれと部下に頼んだ上で海に飛び込み戦死した。

それに反して、総大将の前内大臣平宗盛とその子右衛門督清宗は、何時までたっても入水しないので部下が痺れを切らして船から突き落とした。鎧を脱いでいたので、沈まずに夕闇の海上を泳ぎ回っていたところを、差し出された熊手に自分から縋って助け上げられた。死ぬ気はまったくなかったらしい。

大納言時忠とその北の方は、船上で捕らわれ虜囚となった。

義経は、いちじ平家随一の剛勇、能登守教経に追いかけられたが、船を次々に飛び移って逃げ切った。

皇位のしるしとされる三種の神器のうち、神鏡、神璽は見つかったが、安徳天皇と共に沈んだ神剣はまだ見つからないという。

郷子は、清水寺の観音菩薩に義経の無事を感謝して、お礼の念仏をあげた。

(義経は、義仲との宇治川の戦い、平家との一の谷の戦い、屋島の戦い、壇ノ浦の戦い全てに勝利して、平家を滅亡させ、彼の生涯の目標である父の仇をとることが出来た。平家が滅亡したいま、もう義経が闘う相手はいなくなった。これから、義経の身を案じて、死ぬほどの心配をする必要はないだろう。この腹にいるややが生まれたら、戦の心配をする事もなく義経と三人で仲良く暮らすのだ)

郷子は、嬉しかった。

だが、反面、郷子は、なぜか素直に喜べないものを感じる。

(義経が、天下にその勇名を轟かせ、否応なしに巨大な存在になってしまったいま、鎌倉や法皇は、彼をどのように取り扱うのだろうか)

大江広元の言葉を思い出す。

「心配なのは法皇の口車に乗って、いつ何時、義経殿が自分の方が頼朝さまより、上位だと思いかねない事なのです。武家を中心とした政治体制を創るためには、どんな阻害要因も冷徹に排除されなければなりません。そうでなければ、改革は成功しないからです」

法皇が、平家亡き後、義経を鎌倉政権を牽制するためにの対抗馬として担ぐのではないかという懸念がある。

心配事は、他にもある。

義経が平家の船の漕ぎ手や舵取りを集中的に矢で射た事について、梶原景時は板東武者の風上にも置けない卑怯者のやる戦法だと鎌倉に報告しているらしい。

問題なのは、義経にこういった危険を察知する政治的な感覚が全く欠如している事だった。

(義経は、単純に父の敵である平家を滅ぼすことが、兄頼朝のためになり、ひいては源氏再興につながるものだと生命を賭して闘ってきた。そして、その目的がかなって歓喜の絶頂にある現在、皮肉な事に彼は鎌倉幕府創設のための礎の役割を終えて、あとは、邪魔で危険な存在になりさがるしかないのだろうか。そうであってはならない。なんとか対策をうたなくてなくては)と郷子は焦る。

(少なくとも都にいて、法皇の下で働くのは危険だ。全ての官位を捨て頼朝さまに服従するために鎌倉に帰らなくてはならない。しかし、戦勝の美酒に酔いしれている義経にそのような行動がとれるだろうか)

郷子の心配は尽きない。

義経が、都に凱旋したのは、戦に勝ってからさらに一ヶ月ほど経ってからである。どうやら、法皇に奪還を命じられた三種の神器のうち、安徳天皇と共に沈んだ神剣を必死になって捜していたらしい。しかし、努力のかいもむなしく見つからないために諦めて帰ることにしたという。

義経の下で戦った侍大将や軍兵の大多数は、もう既に、鎌倉を経由してそれぞれの領地に帰ってしまっているが、それでも数百騎の軍兵を引き連れて都に凱旋した義経は、壇ノ浦の海戦で圧倒的勝利を収めた英雄を一目見ようとするおびたしい群集に迎えられた。

紅い組紐を巻いた黒馬に乗って、先頭を進む義経は、赤地錦の直垂に、紅下濃の鎧を着て、黄金造りの太刀を突き、他を圧倒して華やかで一人だけ一段と目立っている。

群集から、義経を褒め称える声が上がると、義経は満面の笑顔をうかべ上機嫌で手を振っている。

この行進の最後には、捕虜になった平家の総大将宗盛やその子清宗や大納言時忠などの高官が、顔が見えるように御簾が上げられた牛車に乗って引き回されている。

その他捕縛された名のある数十名の侍も後ろ手に縛られ、馬に乗せられて引き回されているが、女院や多くの侍女、雑仕女などは、すでにしかるべき所に軟禁されていて、引き回されることはない。

凱旋軍と捕虜の牛車が、六条の東洞院大路を通っていくと、見事な細工を施した御車が十台ほど並んでいた。御簾が下りているので乗っている人物はわからないが、その中の一段と立派な御車は、明らかに後白河法皇のものであった。

義経が、凱旋を終えて、堀河館に帰ってきたのは、その日の夕刻だった。

郷子と静が留守居役の郎党達と正門で迎えたが、二人が仲よく並んでいるのを見て義経は嬉しそうだった。

郷子に向かって言った。

「ややは、元気か」

「はい、順調でございます」

義経は、次に静に向かって言う。

「あとで戦勝祝いの舞を頼む」

「おまかせください」

その後、いつもの通り酒宴が始まった。義経が不在の時にはまったく寄り付かなかった女房達がどこからともなく沢山集まってきた。義経は、女房たちに囲まれて子供のようにはしゃいでいる。

静が、戦勝を祝う舞をまうとやんやの拍手喝采が起きる。

梶原景時が、隣の侍大将、土肥実平に話している野太い声が聞こえてきた。

「四千の軍兵が必死になって戦って勝ったのに、まるで、義経一人で勝ったみたいな騒ぎだな」

確かに、都の人々は、一人の英雄を誉めそやし、名もなき侍大将や軍兵の活躍には目もくれない。不満に思っている武士も多いに違いない。

しばらくすると、義経が離れて座っている郷子に手招きするので、傍によっていくと、こう言った。

「お腹も随分目立ってきたな。出産は何時ごろになる」

「恐らく秋ごろだと思います」

「それでは、産所が必要だな」

「はい」

「六条室町亭を使ったらいい」

「でも、静さまがお住まいですから」

「いや、静は俺の世話をするためにここ堀河館に移ってもらう」

郷子は、頭を下げた。

この時代、妊婦が産所に移動するのは普通だから、すこし早い感じもするが、郷子も納得できる。

(お産が終わるまでは、義経と同じ臥所で寝る事はないのだから、かえって別の屋敷に離れたほうがいいだろう)

静からは、すでに「御懐妊おめでとうございます」と挨拶されている。そして、「御正室に先にややができてよかったと、母の磯禪師からも言われています」と付け加えた。静の芸人魂は見事だった。

(他の女ならともかく静なら安心できる)

数日後、静が六条堀河館に移ってくると、入れ替わりに郷子と志乃はそれほど離れていない六条室町亭に移動した。須美は、他に用事があるということで堀河館に残された。

室町亭には、宗盛とその子息清宗および時忠が捕虜として武士による監視の下に別々の部屋に軟禁されていた。

宗盛は清盛の三男(時子の長男)であるが、異母兄の長男重盛は病死し次男基盛が戦で早世したため、平家の当主となった。

時忠は、清盛の妻時子の弟で、「平家にあらずば人にあらず」と言った張本人だ。時忠と宗盛は、叔父と甥の関係にある。

郷子は、彼らを敗戦に導き捕縛した源氏の総大将の妻として、彼らの面子を思いやっとなるべく顔を合わせないようにしようと思っていた。だが、食事の世話をしている雑仕女から義経の正室が、この屋敷にいと聞いた宗盛からぜひに会いたいという要請があった。

それならばと、郷子が面会を承諾すると、郷子の部屋を宗盛が直ぐに訪れた。

宗盛は、恐る恐る部屋に入ってきて郷子の前に正座すると、ぼっちらりとした人の良さそうな顔を向けて丁重に挨拶した。

「従一位内大臣平宗盛でござる」

「源判官義経の正室郷子でございます」

郷子も丁重な挨拶を返す。

それから、宗盛は、青白い顔をして、いかにも憔悴した様子でこんな話をした。

「御懐妊されているように見受けられるが、生まれてくる赤子のためにも、出来るだけ殺傷は避け、情けをかけるられるのが前世の因果応報が赤子に及ぶのを避けるためにも良い事のように思われる。わが父清盛は、平治の乱で捕らえた頼朝殿に情けをかけて殺さずに配流とした。

義経殿を含む常盤の子供三人も僧籍に入るという条件で殺さなかった。

今となっては、それが仇になったが父清盛は、世間ではいろいろ悪く言われているようだが、本当は心の優しい情に溢れた人であった。

父も母も心からわたしを愛してくれた。この両親の庇護の下でわたしは何一つ不自由な思いをすることなく育った。それは、わたしの兄弟姉妹みな同じ思いだろう。とにかく兄弟姉妹は多かった。先妻の子の重盛、基盛の二人、後妻である二位の尼時子の子は、わたしの他に、知盛、重衡、徳子、寛子、典子など六人、その他、父が母の懐妊中に手を付けて生ませた娘、昌子と盛子など二人を加え十人が同じ屋根の下で暮らした。母は、自分の生した子も異腹の子も全員分け隔てなく教育し、愛情を注いだ。

父と母の兄弟姉妹も多かった。

父清盛の居館を中心としてこれらの平家一族が、広大な六波羅にそれぞれ豪華な館を建てて住んでいた。一族の誰かに婚姻や出産などのお祝い事がある時には、一族が集まり、祝いの贈り物も競ったので、それはすごい量になった。

一族全員が地位も高く、荘園を所有して財政も豊かだったが、それも、すべて父清盛の才覚と支援のおかげだった。

父清盛の実の父は祖父忠盛ではなく、白河天皇だという噂があるが、わたしは、この噂は真実だと思っている。白河天皇がお忍びで通って寵愛した祇園女御が懐妊したので、忠盛に下賜されたというのがことの真相だ。そうでなければ、武家貴族でありながらあれほどとんとん拍子に出世し、従一位の太政大臣までのぼりつめられるわけがない。

父清盛は、十二歳で従五位下佐兵衛佐に任じられ、二十歳で肥後守、二十九歳で正四位下安芸守になった。保元の乱の戦勝で、太宰大貳に任命されたが、これは、九州を管轄し、外寇、外交をつかさどる大宰府の次官という要職で、父はこの地位を利用して、日宋貿易をさらに発展させ巨万の富を築いた。そして、その富を皇室や公卿に惜しみなく使った。皇室に対しては、御所内に御殿を造営して献納し、また蓮華王院などの寺社を創建して寄贈した。公卿の冠婚葬祭には、必ず宋銭を包んだほか、日宋貿易で得た珍しい唐菓子や絹織物や陶磁器などを贈り、また、頼まれた事はどんな些事でも労を惜しまずやった。

それで、すこしづつ朝廷での勢力を伸ばし平家一族の地位を高めていった。

その後、母の妹の滋子が、後白河法皇の女御となり高倉天皇を生んだ。

わたしの妹の徳子は、その高倉天皇の中宮になって安徳天皇を生んだ。

こうして、皇室との結びつきもできて、平家の地盤も磐石になった。

父清盛は、世間では極悪非道で傍若無人な振る舞いをする暴君のように言われているが、実際には周囲に対しては、細心な注意を払って接していた。

わたしも、子供の頃に父から『人の上にたち、人を使うには相手の立場に立って思いやりを持って接しなければ、人は付いてこないぞ』とくどいほど説教された。父が、人と接する心構えとして、よく言っていたことは、

『人に話すときには、自分の言葉を相手がどのように受け取るか常に考える』

『人の話がつまらなくてもあくびなどせず真剣に話を聞く』

『人が誤りを犯しても、役立たずなど心を傷つけるようなことは言わない』

『人が冗談を言って、それが面白くなくてもにこやかに笑う』

『人がひどい悪口を言っても冗談だと思って聞き流す』

『下位の者も、その家族がいる前では大切な人物として扱う』などだった。

父清盛が非道な暴君でない事は日宋貿易のための港、大輪田泊を大改修した際の事例でも判るはずだ。港は何度石を積み上げて築いても、毎年の風波で崩れてしまう。それで公卿の中には人柱を埋めようという者もいたが、父は『それは罪業である』と認めて、代わりにお経を書いた石を船に積み、船ごと沈める方法で港を完成させた。

また、父清盛は、自分個人の隆盛だけでなく常に一族全体の隆盛を願っていた。

一族の中で、困っているものがいると必ず助けた。

一族の子供達が集まって、仲良く遊んでいるのを見ている時には、目を細め心から嬉しそうだった。

父清盛は、平家一族の神であり扇の要だった。この父が死んでから扇はばらばらになって形をなさなくなった。平家が滅亡するのも時間の問題だった。わたしの責任といえばその通りだが、わたしは、優しい父母に育てられたのもともと戦は好きではなかったのだ。だから、今後平家を再興しようなどとの野望は全く持っていない。もし、命を助けてもらえば、剃髪して仏門に入ろうと思っている。このことを、ぜひ義経殿に伝えてくれないだろうか」

郷子は、子供の目から見た清盛の人物像が世間の風評とあまりにかけ離れている事に驚くとともに深い感銘を受けた。清盛は、ただひたすら家族や親族を愛し、その幸福のために出来うるかぎりの労を惜しまなかった人なのだ。

ただ、平家一族の繁栄のためには、手段を選ばずに他人を犠牲にしたので、非情な暴君といわれるようになったのだろう。しかし、平家一族からみれば、これほど包容力があり頼りになる棟梁はいなかったに違いない。

一方源氏の棟梁頼朝はどうだろうか。自分の地位を脅かす可能性がすこしでもあれば、兄弟であっても、いやむしろ父を同じくする源氏の嫡流の血をひく兄弟であるがゆえに危険な阻害要因とし

て切り捨てようとしている。

清盛と頼朝を比べてみて、どちらに暖かい血が流れているかは歴然だった。

郷子は、宗盛が気の毒になった。武士の家に生まれなければ、平凡な一生を送ったに相違ない。

しかし、郷子は、宗盛の願いを義経に伝えるわけにはいかないと思う。

捕虜の処遇を義経の一存で決めたら、頼朝が烈火のごとく怒るだろう。

棟梁である頼朝の許可を受けることなく、義経が決めたら、義経は頼朝と対等の地位にあると考えている証佐と見做されるのだ。

「お話の内容は良く判りました」

郷子は、宗盛の願いを義経に伝えるとも、伝えないとも言う事ができなかった。

平時忠とは、話さなかったが偶然に廊下ですれ違った事がある。

時忠は、横目で郷子を見るときかにも馬鹿にした様子で「ふん、田舎娘が」と聞こえよがしに言った。

郷子は、生き残って捕虜になった「恥さらし」と言い返したかったが我慢した。

しかし、その尊大な態度が非常に不愉快だった。

その時忠は、すぐに堀河館に移されていった。郷子は、もう会うことはないと思ってほっとしたのもつかの間、とんでもない話が飛び込んできた。

志乃が、あわてて部屋に入ってくると言った。

「郷姫、たいへんです。時忠殿が、義経さまに娘を側室に差し出したいと申し出たそうです」

「またどうして」

郷子は、腹が立った。

(つぎに時忠に会ったら「恥知らず」と言ってやろう。助命のためだとはいえ、自分の娘の貞操を差し出すなど恥知らず以外の何者でもない)

「時忠殿は、娘を差し出す代わりに助命と押収された機密文書の入った文函の返還を求めたのだとか」

「まあ、それで義経は当然断ったのでしょね」

「それが、驚いた事に受けたそうです」

「ええ！なぜ」郷子は絶句した。

郷子は、義経という人物がまったく判らなくなった。

(あの人には、常識というものがないのだろうか)

懐妊している妻も美人で名高い静御前という愛人もいる。

それにもかかわらず、よりもよって敵方の平家の大納言の娘を側室にして、その見返りに助命を約束したうえ機密文書の入った文函も返してしまうというのだ。

あれほど憎んでいた平家と姻戚関係に入り、まだ罪科も決まっていない捕虜の助命を義経の一存で決めてしまった。

鎌倉は、義経が源氏を捨てて平家に寝返ったような印象を持つのではないだろうか。

平家討伐のために、命をかけて戦ってきた部下の将兵も、多大の犠牲を払ってやっと平家を打ち

破り、都に凱旋してきたのに、総大将が平家の捕虜の婿になってしまうという事態に呆れると同時に憤激するのは間違いない。

鎌倉ばかりではなく部下の将兵も、義経を見放すのではないだろうか。

遠からず志乃から、時忠の娘の蕨姫が堀河館に入ったという情報がもたらされた。蕨姫は、美貌ではあるが義経より一歳年下の二十六歳の年増であるという。時忠が、皇室との縁談を希望して、密かに温存していたために婚期を逸したらしい。義経は深窓で大切に育てられた年の割りにうぶな貴族の娘をいたく気に入って、毎晩愛しんでいるという噂だ。

郷子は、自分もそうだが同じ館に住んでいる静の気持ちを思いやると切なくなる。静は、自分は白拍子の芸人で、正室にも側室にもなれないと割り切っているが、義経を愛しているだけにそのつらさはいかほどのものであろうか。

郷子の場合、頼朝によって決定され、義経の意志にかかわらず送り込まれたので、仕方が無いと割り切れたのだろうが、蕨姫の場合には、義経自らの意志で決めたものだ。きっと心のなかで泣いているに違いない。

この件について、鎌倉は沈黙を守っている。

ただ、法皇は、大天狗ぶりをしめしこの婚姻を喜んでいるらしい。

義経は、鎌倉からの独立を決めたに違いない。そうであれば、義経を応援してやろうということらしい。

法皇は、すぐに評定をひらき、鎌倉に相談する事もなく平時忠の能登への流罪を決定してしまった。死罪を免ずることにしたのは、時忠が武士ではなく、朝廷の文官であり、平家とともに屋島へ落ち延びたのも、安徳天皇と三種の神器を守護するためであった。その証拠に、戦乱のあいだでも時忠は文官の衣裳で押し通し、鎧兜は一切身に着けなかったというのである。

この件についても、鎌倉は不気味に沈黙している。

郷子は、心配でいてもたってもいられなかった。

政子ならどうするだろうか。

きっと、義経と蕨姫が寝ている寝所へ乱入して騒ぎたてるのではないか。

しかし、郷子には、そんな勇気は無かった。ただ、義経が自分で目をさますのを待つより方法が無いが、もう手遅れなのではあるまいか。

大江広元や三善康信の顔が浮かぶ。もしかすると、彼らは、義経が危険な阻害要因であることが明らかになったとして、排除する画策をしているのではなかろうか。

志乃が集めた情報によると、法皇は、さらに手を打っているらしい。

平家追討の恩賞として頼朝を従二位に昇格させた後、すぐに義経軍として闘った二十数名の武将に鎌倉に諮ることなく官位を与えたのである。

実に巧妙なやり方であった。鎌倉幕府の創設を牽制するために、多くの武将を朝臣にしてしまおうというのである。頼朝の反対を抑えるために、まず彼の官位をあげておいたうえである。

そして、義経については、鎌倉の承認が得られないとして、官位の昇格を見送った。当然、義経に



は、不満が残るだろう。

頼朝は、自分の官位の昇格はさておき、勝手に官位を受けた二十数名の武将に対して、次の処置を取る事を表明した。

[東国に戻ってくる事を禁ずる。命令に違反し、墨俣(美濃と尾張の国境)を越えて東国に入った者は本領を召し上げ、断罪に処する]

鎌倉の許可を受けずに朝臣となったものは、もはや鎌倉の御家人とはいえず、都で野たれ死ねという趣旨である。

第十七章 了